

竹やぶで鬼ごっこ

私が小学校の頃、五百坪位ある生家の西側、五、六十坪の土地に、根元の直径七、八センチ、長さ十五m位の唐竹が見事に生えていた。

この竹は農家にとっては、大切な農業資材である。秋、稲刈り後稲束を架けて乾燥させるのに使用する。長くて丈夫だった。切ってから四、五年は使える。

生家では二百本以上用意しており、木小屋の雨が当たらない軒下に保管してあった。古くなり使用に耐えなくなつた分だけ、切つて補充する。

竹は五十センチから一メートル間隔をおいて生えていた。素足で登つては、隣の竹に乗り移る。高く登れば登る程大きく揺れて、遠くの竹に移れる。面白い遊びを思いついた。

毎日のように集まつて遊ぶ友達が多い。パッタ遊び、釘さし、鞠ぶつつけ、何でもやった。

夏休みには、近くの小川を堰き止め、比較的大きいプールを作り、男の子も、女の子も入り乱れ、スップンポンで泳ぐ。私達の小さい頃は着物だ、パンツを穿いている子は居ない。

悪さをすれば、着物を捲られ、お尻を平手で叩かれる。おとなしい子にソツト近かづき、着物めくりをやり、大笑い。親にばれて、今度は私が父親にお尻を叩かれた。

水遊びで体が冷えると、竹やぶで鬼ごっこだ。竹はスベスベしているので、登るのが難しい。手が届く所を両手でシッカリ掴む、両足で竹の節を挟み、手と足を交互に動かし登っていく

竹は生えてから三、四年は、高く登り過ぎても折れずにしなるだけだ。登り過ぎ、隣の竹に乗り移るタイミングが悪いと、竹がU字に曲がり折れないけれど、着地してしまふ。着地した子は、罰として鬼になる。落ちた竹に登り追いかける。捕まえるのではなく同じ竹に乗り移ればよい。鬼が交代して他の友達を追う。

生家に行つても今は、見事な竹やぶや、百五十坪以上ある茅葺きの母屋、木小屋、皇紀二六〇〇年記念の風呂場、太い栗の木、くるみの木、柿木等、幼い時の思い出は何もない。